

江州「庾樓」の出現するまで

―ある虚構の詩跡の形成条件―

一

潯陽欲到思無窮
庾亮樓南湓口東
樹木凋疏山雨後
人家低濕水煙中
菰蔣餒馬行無力
蘆荻編房卧有風
遙見朱輪來出郭
相迎勞動使君公

潯陽に到らんと欲して 思ひ窮り無し
庾亮樓の南 湓口の東
樹木は凋れて疏らなり 山雨の後
人家は低くして濕ふ 水煙の中
菰蔣 馬に餓はせて 行きて力無く
蘆荻 房を編みて 卧して風有り
遙かに見る 朱輪來りて郭を出づるを
相ひ迎へて 勞動せん 使君公

(大意) 潯陽に到着しようとして、思いが止めどなくこみ上げる。そこは名高い庾亮樓の南、湓水の河口の東にある。山

住 谷 孝 之

に雨が降った後、樹々は葉も枯れ落ちて疎らになり、水邊のもやが立ちこめる中、人家は低くじめじめしている。まもなくを食べさせられる馬は、足取りも弱々しく、蘆や荻を編んだ民家は、寝ているとすきま風が吹きこむ。朱塗りの車が城郭の門から出てくるのが、かなたに見える。わざわざのお出迎えに、江州の知事殿に感謝申し上げよう。

右の詩は、中唐の詩人白居易(字は樂天)が、元和十年(八一五)、江州(潯陽・湓城・柴桑・九江、現江西省九江市)の司馬(州の屬僚)に左遷され、當地に初めて到着した際に詠んだ七言律詩「初到江州」である。第二句にある「庾亮樓(庾樓・庾公樓)」とは、東晉初期の大貴族にして政治家・武將としても名高い、庾亮(字は元規。二八九―三四〇)の晩年、江州刺

史のときの風流韻事の舞臺となつたとされる樓である。白居易は、本詩以外にも、江州司馬在任の約三年間、しばしばこの江州の「庾樓」(庾亮樓・庾公樓)を詩に詠み、詩跡としての地位を完全に定着させた。そして以後、歴代數多くの著名な詩人たちによって江州の庾樓は詠まれることになる。⁽⁴⁾

しかし、白居易が詩に詠じた江州の「庾樓」は、實は史實には全く根據のない、虚構の詩跡なのである。このこと自體は既に古くからさまざまな文獻の中で指摘されているが、⁽⁵⁾本論では、詩跡の原點となつた「庾樓」の故事と六朝期の江州の變遷とを、まず史實に即して述べた上で、唐以前の六朝期、庾亮の故事からほど近い時代に歌われ、恐らくは詩跡・江州「庾樓」の原型となつた江州(潯陽・湓城)の城樓に言及する詩歌を取り上げ、その歌われ方について論じ、最後に、詩跡・江州「庾樓」のような、虚構の詩跡が成立する要因とは何かについて述べてみることにしたい。

二

最初に、江州「庾樓」の詩跡のもととなつた、史實としての庾亮の故事について紹介することにした。それは、南北朝時代、劉宋の臨川王劉義慶『世說新語』第十四「容止篇」に見える、次のエピソードである。

庾太尉在武昌。秋夜氣佳景清。佐吏殷浩・王胡之之徒、登南樓理詠。音調始適、聞函道中有屐聲甚厲、定是庾公。俄而率左右十許人步來、諸賢欲起避之。公徐云、「諸君少住、老子於此處興復不淺」。因便據胡床、與諸人詠譚、竟坐甚得任樂……⁽⁶⁾

〔書き下し〕 庾太尉(庾亮)武昌に在り。秋夜、氣(周圍の氣配)佳くして景(月光)清し。佐吏(刺史の屬僚)殷浩・王胡之の徒、(城の)南樓に登りて理詠(詩を吟詠)す。音調始めて適まるに、函道(樓の階段)の中に屐聲(下駄の音)の甚だ厲しき有るを聞く。定めて(きっと)是れ庾公(庾亮)なり。俄にして左右十許の人を率ひて歩み來たり。諸賢(殷浩・王胡之ら)、起ちて之(庾亮)を避けんと欲す(座を譲ろうとした)。公(庾亮)、徐に云へり、「諸君、少らく住まれ。老子(庾亮の自稱)も此の處に於いて興復た淺からず(十分に樂しめるよ)」と。因りて便ち胡床(座具)に據り、諸人と詠譚(吟詠談笑)し、坐を竟ふるに甚だ樂しみに任す(思ふ存分に樂しむこと)を得たり……。

『世說新語』の撰者劉義慶(四〇三―四四四)は、五世紀前半の人であり、本書の成立は、庾亮のエピソードから約百年後である。ここでは、冒頭に明示されているように、庾亮の風流

韻事のエピソードは、武昌（現湖北省鄂州市）の城樓でのこととされている。

また、『世說新語』より約二百年後、七世紀の初唐に編纂された、房玄齡『晉書』卷七十三、庾亮傳の中でも、同様の内容が記述されているが、やはりここでも、当該エピソードを武昌での出来事としている。

亮在武昌。諸佐吏殷浩之徒、乘秋夜往共登南樓。俄而不覺亮至、諸人將起避之。亮徐曰、「諸君少住、老子於此處興復不淺」。便據胡牀與浩等談詠竟坐。其坦率行己、多此類也。

『晉書』庾亮傳の記述によると、庾亮は東晉の咸和四年（三二九）、蘇峻の亂を鎮定後、中書令（宰相）を辭して、當時東晉の朝廷があった建康（現江蘇省南京市）を退き、持節都督豫州揚州之江西宣城諸軍事・平西將軍・假節・豫州刺史・領宣城內史として蕪湖（現安徽省蕪湖市）に出鎮した。そして、同九年（三三四）に太尉・荊州刺史の陶侃が死去すると、その後任として、都督江荆豫益梁雍六州諸軍事・領江荆豫州刺史・征西將軍・假節となり、武昌に鎮したとある。この記述に従うならば、右のエピソードは、彼の江州刺史就任から、咸康六年（三四〇）に死去する間にあった出来事ということになるであろう。ところで、『晉書』の本傳の記述に見える、庾亮が就任した江

江州「庾樓」の出現するまで（住谷）

州刺史の職であるが、實は、庾亮が生きた東晉時代の江州の治所は、先述した白居易の赴任した江州（潯陽・湓城）ではなかった。そのことは、梁の蕭子顯『南齊書』卷十四、州郡志上、江州の條に見える以下の記述からも明らかである。

江州、鎮尋陽（潯陽）、中流衿帶。晉元康元年、惠帝詔、「荆・揚二州、疆土曠遠。有司奏割揚州之豫章・鄱陽・廬陵・臨川・南康・建安・晉安爲新州。新安・東陽・宣城、舊豫章封內、豫章之東北、相去懸遠。可如故屬揚州。又割荊州之武昌・桂陽・安成、并十郡、可因江水之名爲江州、宜治豫章」。庾亮領刺史、都督六州、云以荆・江爲本。……臨終表、江州宜治尋陽。以州督豫州新蔡・西陽二郡、治湓城、接近東江諸郡、往來便易。其後庾翼又還豫章。義熙後、還尋陽。

この記述の中で、晉代（西晉・東晉）の江州の治所に關する記述は、次の四點に要約できる。

①西晉の惠帝の元康元年（二九一）、それまで廣大だった荊州・揚州の二州の領域をそれぞれ分割し、揚州の豫章・鄱陽・廬陵・臨川・南康・建安・晉安の七郡と、荊州の武昌・桂陽・安成の三郡を併せて、新たな州として江州を設置した。この時、江州の治所は豫章郡（現江西省南昌市）に置

かれた。

②東晉の咸康六年（三四〇）、領江州刺史であつた庾亮の臨終時の上表によつて、彼の死後の一時期、江州の治所が潯陽郡に遷された。

③その後まもなく、庾亮の後任者である江州都督・庾翼（庾亮の弟）によつて、江州の治所はふたたび豫章に戻された。

④東晉末の義熙年間（四〇五—四一八）、また治所は潯陽に遷された。⁽¹⁰⁾

この一連の記述から、以下の二點が改めて確認できる。①庾亮の生前、江州の治所は潯陽ではなく豫章であつた。②庾亮が晩年に出鎮していたのは武昌であり、さらに江州以外の州の都督・刺史を兼任していた状況を考へても、江州の治所である豫章に赴任したことは恐らくはなかつた。

以上、史書の記述に沿つて庾亮の故事と彼の經歷を見てきたが、史實における庾亮の晩年の政治家・軍人としての活動據點、および問題の故事の舞臺が潯陽ではなく、武昌であることは間違いないと言えよう。さらに、庾亮の生涯の活動において、潯陽の城樓と直接に關連する要素は見あたらないことが確認できる。それならば、なぜ潯陽の城樓が庾亮と關連づけられるに至つたか、このことがより一層の疑問となつてくる。

管見の限りでは、歴史史料からこの疑問を明確に説明できる

根據は現時點では見當たらぬ。ただ、庾亮の生きた西晉・東晉の地方行政機關の複雑な變遷が、その間接的な一因となつたのではないかと筆者は推測する。『晉書』『宋書』『南齊書』の地理志・州郡志などから、西晉・東晉期の地方行政の變遷を見ると、（先述の江州の治所の變遷からもうかがえるように）ちょうど華北の五胡十六國の激しい戰亂の情勢と呼應するかのようにな、江南のフロンティアに偏安する東晉も、州治の變遷・郡の新設や廢止などが頻繁に生じているのが確認できる。ところが、東晉に續く南朝期になると、北魏が華北を統一し、南北中國が對峙する固定的な情勢が形成された。一方これと對應するように、南朝においても地方行政の單位が安定し、江州の治所はほぼ一貫して潯陽郡に置かれ、續く隋唐時代も同様に、潯陽（隋の煬帝の大業年間の一時期、九江郡に改稱）は江州の治所であり續けたのである。

東晉より後の、南朝（五世紀前半）から隋唐にかけて、（白居易の時代までとしても）約四百年間という非常に長い期間、江州の治所は一貫して潯陽（九江）に置かれ續けた。このことは、人々の意識に、「江州＝潯陽（九江）」という意識を強く固定化させることになつたと考へても不自然ではなからう。そして、隋唐の時代に、「江州＝潯陽（九江）」イメージが強く定着したことによつて、ずっと以前の東晉の時代、庾亮が刺史であつた東晉時代の江州の治所も、後世の江州（潯陽・九江）にあつた

と混同され、これが「庾樓」江州」のイメージを形成する間接的要因となったのではないだろうか。

三

前節では、史實における庾亮の故事は武昌の出来事であること、一方の白居易が詩に詠んだ江州「庾樓」は、歴史的には庾亮とは縁もゆかりもない、虚構のものであることを改めて確認した。⁽¹¹⁾ところで、詩跡・江州「庾樓」は、白居易の中唐期（九世紀初期）あたりに出現した虚構の詩跡だとしても、それが完全に無から生じるはずはなく、おそらくは、以前から當地に存在していた江州（潯陽・湓城）の城樓が、詩跡・江州「庾樓」のイメージ形成の原型として、ある一定の役割を果たしていただろうと思われる。そこで本節以下では、潯陽（湓城）の城樓で詠まれたことが判明している六朝期の詩作品を取り上げ、詩中での城樓がどのように歌われているのかを述べてゆくことにする。

潯陽（湓城）の城樓で詠まれたことが明らかな、現存する最古の詩作品は、おそらく劉宋の謝瞻と陶淵明の以下の二首であらう。

王撫軍庾西陽集別時爲豫章太守庾被徵還東 謝瞻⁽¹²⁾
祇召旋北京 （天子の）召を祇みて 北京（建康）に旋り

江州「庾樓」の出現するまで（住谷）

守官反南服	官を守りて 南服（豫章）に反る
方舟新（析）	舊知 舟を方べて 舊知に析れ
對筵曠明牧	筵に對ひて 明牧に曠かる
舉觴矜飲餞	觴を舉げて 飲 餞に矜み
指途念出宿	途を指して 出宿を念ふ
來晨無定端	來れる晨は端を定むる無く
別畧有成速	別れの畧は速やかなるを成す有り
頽陽照通津	頽れおつる陽は通へる 津に照り
夕陰暖平陸	夕の陰は平らなる陸に暖し
榜人理行轡	榜人は行轡を理へ
輶軒命歸僕	輶軒は歸僕に命ず
分手東城闌	手を分つ 東の城の闌
發棹西江隩	棹を發す 西の江の隩
離會雖相親	離れの會は相ひ親しむと雖も
逝川豈往復	逝く川は豈に往復せんや
誰謂情可書	誰か謂はん 情は書す可しと
盡言非尺牘	言を盡くすは 尺牘に非ず

於王撫軍座送客 陶淵明⁽¹³⁾

秋日淒且厲 秋の日は淒しく且つ厲し
百卉具已腓 百の卉は具に已に腓れぬ
爰以履霜節 爰に霜を履むの節を以て

中國詩文論叢 第二十集

登、高、饒、將、歸、

高き（樓）に登りて 將に歸らんとするものに
饒す

寒氣冒山澤

寒き氣は山と澤とを冒い

游雲條無依

游る雲は條ちに依る無し

洲渚四綿邈

洲渚は四に綿かに邈けく

風水互乖違

風水は互ひに乖違る

瞻夕欣良讌

夕を瞻て 良き讌を欣ぶも

離言聿云悲

離れの言は聿に云に悲しむ

晨鳥暮來還

晨の鳥は暮に來たり還り

懸車斂餘暉

懸車は餘れる暉りを斂む

逝止判殊路

逝くと止まると判かに路を殊にす

旋駕悵遲遲

駕を旋らせば 悵みて遲遲たり

目送回舟遠

目に回る舟の遠ざかるを送れば

情隨萬化遺

情は萬化に隨ひて遺る

右の二首は、劉宋の永初元年（四二〇）、豫章太守に赴任する謝瞻と、西陽太守（西陽郡は現湖北省黃岡市黃州區）から太子庶子に轉任し、都の建康に赴く庾登之（庾西陽）の二人を送別するため、撫軍將軍・江州刺史の王弘（王撫軍）が、潯陽の側を流れる湓城湓水の河口（湓口）の南樓で宴を催した際、宴の主賓の一人である謝瞻自らと、この宴に出席していた陶淵明が詠んだ詩である。陶謝の二首は、離別を主題とする詩とし

て、いずれも六朝期を代表する作品である。謝瞻の詩は、六朝を代表する詩文集『文選』卷二十の「祖饒」の部に收録されることから、同時代に一定の高い評價を得た作品であると推測される。もう一方の陶淵明の詩は、秋の訪れを告げる風景と、離別の場においてわき上がる、詩人の惜別の情とが相互に照應し、豊かな抒情性を生み出すことに成功した作品である。これら二首の離別詩において、潯陽の城樓は、離別の抒情を生み出す空間として、初めて姿を現している。

だがその一方、二首の中における城樓の存在は、極めて消極的なものに留まっているのも事實である。まず謝詩では、そもそも詩中に城樓に言及する言葉自體が存在しない。この詩が潯陽（湓口）の城樓で歌われたことを現代の讀者たる我々が知る手がかりは、李善による題下注の記述（「集曰、謝還豫章、庾被徵還都。王撫軍送至湓口、南樓作」）によってのみである。假にこの記述がなければ、この詩が作られた具體的な場所（城樓）はおろか、地名（潯陽）すらも、全く不明となってしまうであろう。言い換えれば、本詩における潯陽（湓口）の城樓とは、偶然その場で離別の宴席が催され、その時に歌われたという、單に「詩が作られた場」という空間としての意味合い以上のものではないということである。さらに極論すれば、この詩は、假に潯陽以外の全く別の場所で歌われたとしても、何ら違和感や問題のないものとなっているのである。

一方の陶詩の場合はどうだろうか。こちらは謝詩とは異なり、詩中に「登高餞將歸」の句が存在することによって、讀者はこの詩が高い樓臺で作られたことを知ることができる。また、詩自體の完成度から謝詩と比較した場合でも、前者が對句を多用し、しかも「祇召旋北京、守官反南服」「方舟析舊知、對筵曠明牧」「頽陽照通津、夕陰暖平陸」「分手東城闌、發棹西江隩」といった生硬で平板な表現が隨處に目につき、煩鬱然とした印象を受けるのに對し、陶詩の方は、豊かな抒情性をたたえた風景描寫によって、表現はより一層の伸びやかさを獲得し、はるかに高い文學的到達度に達している。しかしそれにもかかわらず、潯陽の城樓を持つ詩的空間としての機能という點から見た場合、陶詩もやはり謝詩と大差ないと言えるだろう。なぜなら、詩中にある「高（樓）」とは、あくまで城樓としての一般的な概念の範疇を出るものではなく、「潯陽（湓口）の城樓」というような、その地の個別性・特殊性を詩題及び詩中から讀者にうかがわせる痕跡は皆無だからである。また、陶詩の風景描寫のあり方にしても、詩人である陶淵明が、宴席の場において目睹する實景を詠んでいるというよりも、風景の形をとった、外在化された觀念を詠じているような印象を強く受けるものとなっている。例えば「秋日淒且厲、百卉具已腓」「寒氣冒山澤、游雲倏無依」「晨鳥暮來還」などの風景描寫の句は、單なる紋景として描き出されたものではなく、秋の季節からイメージされ

江州「庾樓」の出現するまで（住谷）

る凋落の觀念や、定常なきものの象徴、無爲自然の營みの象徴といった、觀念の色彩に強く染め上げられたものとして、詩中に歌われていると言った方がふさわしい。⁽¹⁵⁾

陶詩のこのような外在化した觀念としての風景描寫は、詩中において、詩人の情と溶けあうことで、ある種の抒情性を巧みに表現することを可能にする一方、詩が歌われた空間を特定する個別性・具體性を希薄なものとしてしまふ両面性を持っている。この「外在化した觀念としての風景描寫」が、陶淵明のこの詩の場合では、詩的空間の場としての詩跡のイメージを形成することを妨げているのである。

以上、「潯陽（湓口）」が城樓の詩的空間としてどのように歌われているか」という觀點から、陶謝の二首の詩を論じてきたが、彼らの詩における「潯陽（湓口）の城樓」という場は、詩跡のような個別的・具體的なイメージで描き出すまでには至っていないということが判明した。ではなぜ、彼らの詩は、潯陽（湓口）の城樓という詩的空間を、詩跡という形で個別化・具體化することができなかったのであろうか。この疑問への理由として、筆者が注目するのは、彼らが生きた時代の文學状況についてである。すなわち、自らが現實に體驗している場というものを、個別的な體驗として、詩中にそのままに現出しようという意識や手法が（皆無とは言わないまでも）未成熟だったからではないだろうか。

そのことは、とりわけ先ほどの陶詩の風景描寫に顯著である。そこで歌われている風景は、あくまで萬化（萬物の變化）に對する詩人の觀念を象徵するものとして表出されたものであり、詩人が直接目にする風景を生そのまま寫生したものは、大きく性格を異にしている。陶淵明の少し前の東晉初期から中期にかけての時代は、老莊思想にもとづいた玄學を主題とし、現實社會や詩人個人の體驗から乖離した抽象的・觀念的な内容を歌うことを特徴とする玄言詩が大いに流行した。その時期からいまだ時を経ておらず、詩人が現に在る空間を、個別的・具體的に表現しようとする意識が希薄だった當時の文學環境では、詩跡のようなものを積極的に生み出そうとする意識自體が起きることは、まずなかったと言つてよいだろう。⁽¹⁶⁾ なぜなら、詩跡とは、文學作品を生み出す場自體の獨自性・個別性への關心によつてこそ生まれるものだからである。言い換えれば、謝瞻・陶淵明の時代には、詩跡というものを生み出すための文學環境自體が未だ成熟してなかったということなのである。

四

次に、謝瞻・陶淵明の時代から約百年後の南朝後期の梁・陳（六世紀頃）の時代の詩を見ることにする。具體的には梁の何遜（四六七？―五一八？）・陳の張正見（六世紀中ば）の以下の二首である。

與沈助教同宿湓口夜別詩 梁・何遜⁽¹⁷⁾
 我爲潯陽客 我爲潯陽の客と爲り
 戒旦乃西游 戒旦に乃ち西に遊ぶ
 君隨春水駛 君も春水の駛き（流れ）に隨ひ
 雞鳴亦動舟 雞鳴（の時）に亦た舟を動かす
 共泛湓之浦 共に湓の浦に泛び
 旅泊次城樓 旅泊（船を停泊）して 城樓に次る
 華燭已消半 華燭 已に消ゆること半ばにして
 更人數唱籌 更人 數（漏刻の）籌を唱ふ
 行人從此別 行人 此從り別れ
 去去不淹留 去り去りて 淹留らず

湓城詩 陳・張正見⁽¹⁸⁾
 匡山暖遠壑 匡山 遠壑に暖にして
 灌壘屬中流 灌壘 中流に屬ふ
 城花飛照水 城花 飛びて水に照り
 江月上明樓 江月 明樓に上る

最初に挙げた何遜の詩は、梁の天監九年（五一〇）から十一年（五一二）にかけて、江州（潯陽・湓城）にて建安王蕭偉の記室參軍であつた頃、共に湓口から旅立つこととなつた國子助

教の沈峻との送別の場で歌われた作品である。⁽¹⁹⁾

何遜のこの詩は、六朝後期に作られたものだけあって、前節に挙げた陶謝の詩とくらべ、江州（潯陽・湓城）の城樓は、はるかに個別的・具體的なイメージをもって歌われている。まず、詩題および詩の中にある「湓口」「潯陽」「湓之浦」の語は、それに續く「城樓」の語とともに、詩人の今いる送別の場として個別性をもった存在であることを際立たせている。さらに、その後に續く「華燭已消半、更人數唱籌」の二句は、樓内での離別の酒宴の様子を具體的かつ克明に描き出すとともに、夜も更け、明朝の別れの時が迫りくることが意識されることによって、詩人の惜別の情と緊張感が高まるさまを暗示するものにもなっている。六朝期の離別詩の作り手として、最も傑出した存在である何遜の確かな手腕を見ることができであろう。⁽²⁰⁾そして、この詩に歌われる、離別の場としての江州（潯陽・湓城）の城樓は、先の陶謝の詩における、單なる詩作の場としての意味合いのみにとどまらず、詩人が今いるこの離別の瞬間・その一回性を、リアルにかつ的確に表現するための詩的空間として、機能するまでに至っているのである。

さらに、何遜よりも時代が下った、陳の張正見の詩における湓城（潯陽）の城樓は、最初に挙げた陶謝の二首はもとより、先の何遜の詩と比較しても、（詩としての評價は別として）そこが湓城（潯陽）という地の城樓にほかならないという個別性を、

江州「庾樓」の出現するまで（住谷）

一層強く際立たせるものとして描かれている。前半二句では、湓城（潯陽）の地を特徴づける周囲の風物が、「匡山（廬山）」「灌嬰（前漢の武將・灌嬰の城）」「中流（ここでは長江のこと）」と、固有名をもって歌われる。このように、湓城（潯陽）という地を特色づけるランドマーク的な景物を前半で列挙することで、續く後半二句で歌われる「風に乗って長江の水面に舞う花」や「月光の降りそそぐ城樓」も、詩中であって、單なる花や城樓という抽象性・一般性を越えた、湓城（潯陽）のイメージを華やかに彩るモチーフとして、讀者に鮮明な印象をもたらすようになっている。

そして、張正見のこの詩は、『永樂大典』卷六六九七、江州志・碑碣の條、「庾樓」の項の「梁以來題庾樓詩碑」（北宋の宣和六年（一一二四）の刻）の記述の下に、「起張正見、止胡次仲（未詳、北宋の人か？）、凡十四人二十五首、爲一碑」と注記されているものでもある。つまり、張正見の詩は、江州「庾樓」の詩跡と歌ったと見なしうる作品として、後世の庾樓の詩碑中に記されていたのである。この事實は、張正見のこの詩が、後世の人々に、詩跡としての江州「庾樓」の先驅的存在と目されていた作品であったことを示している。⁽²¹⁾

今挙げた何遜・張正見の二首の詩からは、前節の陶謝の詩の場合と違い、湓城（潯陽）の城樓を明らかに個別のものとして描き出そうとする意圖がうかがえる。これらの詩において、江

州（潯陽・湓城）の城樓は、土地としての江州（潯陽・湓城）を特徴付けるランドマークの一つとして描き出される段階にまで至っていると言ってもいいだろう。

だがそれにもかかわらず、何遜・張正見のこの詩は、詩跡・江州「庾樓」を歌った作品とは見なせないのも事實である。なぜなら、何遜・張正見のいずれも、詩中において言及するのは、詩人たちがいる江州（潯陽・湓城）の城樓という現實の詩的空間であって、詩跡・江州「庾樓」を特徴付けるもう一つの要素、「庾亮の故事」という歴史的由來については一切ふれていないからである。このように詩跡「庾樓」の持つ最も肝心な要素が脱落している以上、これらの詩は、湓城（潯陽）の城樓を歌った詩とは言えるが、詩跡・江州「庾樓」を歌った作品と見なすのは無理というものであろう。

では、何遜・張正見の詩が、江州（潯陽・湓城）の城樓をそれ自體として、個別的・具體性に描こうとしているにもかかわらず、詩跡「庾樓」として歌われる段階にまで至らなかったのはなぜであろうか。その第一の要因として、南朝という時代が、「庾亮の風流韻事」があった東晉時代からいまだ長い時を経ておらず、それが「武昌であった出来事」として、六朝期の人々には強く記憶されていたことが、何よりも大きいだろう。史實としての庾亮の事跡から、「庾亮＝武昌」の連想を拂拭し、それを「江州（潯陽・湓城）の城樓」という虚構の舞臺に結びつ

けるには、東晉のすぐ後に成立し、いまだ前王朝の時代の記憶が廣く共有されていた南朝の時期では、もとより困難だったに違いない。

第二の要因として、第二節で述べたように、東晉期における江州の治所の不安定さという事實も、大きな意味をもっていたと言えるだろう。東晉期の現實の江州が、長らく潯陽（湓城）ではなく豫章であったという事實は、詩跡・江州「庾樓」の由來の根據たるべき、「庾亮＝江州刺史＝潯陽」のイメージの形成を大きく妨げたに違いない。江州の治所が潯陽（湓城）に落ち着いた東晉末から十數年ほどしか隔たっていない謝瞻・陶淵明の頃はもちろん、何遜・張正見らの百數十年後という時間の経過では、治所としての「江州＝潯陽（湓城）」のイメージを、人々の意識の中に完全に定着させることは困難だったことであろう。

※ これまで虚構の詩跡として江州「庾樓」について論じてきたが、以下に、庾亮の故事に由來するもう一つの詩跡である、武昌の南樓（庾亮樓）についても簡単に述べる。武昌の南樓（庾亮樓）は、江州「庾樓」のような全くの虚構の詩跡とは異なり、第二節で挙げた『世說新語』や『晉書』の記述の通り、史實の庾亮の故事があった地で生まれた詩跡である。この武昌の南樓（庾亮樓）を歌っ

た詩は、江州「庾樓」の出現する中唐期よりも少し早い時期から確認できる。例えば盛唐の李白「陪宋中丞若思武昌夜飲懷古」は、「清景南樓夜、風流在武昌。庾公愛秋月、乘興坐胡牀」と歌う。また同じく盛唐の杜甫「秋日寄題鄭監湖上亭三首」其一にある「碧草逢春意、沅湘萬里秋。池要山簡馬、月淨庾公樓」の句も、清の仇兆鰲『杜詩詳注』に「沅湘・山簡・庾公……皆引荊州事」とあることから、ここでの「庾公樓」も、やはり武昌の南樓（庾亮樓）のことを歌っているのは明らかである。このように、武昌の南樓（庾亮樓）は、江州「庾樓」の場合とは違って、「庾樓」としての詩跡イメージを形成するのにさまざまな曲折を経る必要が無かった分、その詩跡化もよりスムーズに確立していったことがうかがえる。⁽²²⁾⁽²³⁾

さらに第三の要因として、庾亮のこの事件を詩歌の題材として歌うには、眞の意味で「歴史化」し「故事化」される段階に至ってなかったということも考えられよう。すなわち、六朝の人々にとって、庾亮のこの事件とは、全くの歴史上の一佳話としてではなく、自分たちの生きている時代から少し前にあった事件、あるいは「自分たちと地続きの時代の出来事」として意識され、十分に客體化されるに至っていないかった、ということ

江州「庾樓」の出現するまで（住谷）

である。言い換えれば、六朝時代の事件は、同時期の六朝の人々の中においては、「自分たちと時代精神を異にした人々の営み」として、眞に「歴史化」され「故事化」される契機を持たなかったということである。六朝（とりわけここで語られる東晉・南北朝）は、王朝交替を繰り返した時代だったが、社会的には、貴族制が持續（または有力門閥貴族が存続）したことによって、歴史的斷層を含まない一貫した歴史と看做されてきた。そのことが、庾亮の事跡を、「かつての六朝貴族の風流韻事」の象徴として眞に歴史化することを妨げたのである。そして、こうした六朝時代の事件である庾亮のエピソードが眞に「歴史化」し「故事化」されるには、南北朝時代の終焉による六朝貴族制の消滅と、隋唐の統一王朝の成立による新たな時代の到来という、「歴史の斷層」を隔てることが必要だったのではなからうか。換言すれば、「庾亮のエピソード」という特定の事件が、歴史の斷層（ここでは南北朝から隋唐の統一王朝）という、眞に歴史化される契機を必要とすることで、はじめて「かつての六朝貴族の風流韻事」の象徴として歴史化・故事化されるに至ったということである。

※ 同じ六朝時代に起きた事件であっても、それが大きな歴史の斷層を隔てる契機を得た場合は、詩跡、あるいは懷古詩の題材として取り上げることが可能になる。例えば

中國詩文論叢 第三十集

西晉の大貴族・石崇が元康六年（二九六）に催した豪華な離別の宴「金谷の聚い」は、すでに南齊の謝朓の樂府詩などに、詩の題材として取り上げられている。このようなことが可能になったのは、西晉・東晉の交替期に起きた「永嘉の亂」という大動亂と、それによる、金谷の聚いの舞臺であり、六朝貴族たちのかつての支配地たる、中原の地（華北）の喪失という、大きな「歴史の斷層」を隔てたことによって、眞に歴史化されたからであらう。

また唐代内部を取れば、「安史の亂」（七五五—七六三）という歴史の斷層を隔てること、前半期の事件は、後半期になると歴史化され、故事化される。白居易の「長恨歌」における玄宗と楊貴妃の故事は、白居易の生きた時代と數十年の距離しかなかったが、安史の亂を隔てること、「長恨歌」が作られることが可能となるほどに、歴史化され故事化されたのである。

以上、六朝期の潯陽（湓城）の城樓を舞臺に歌われた詩作品を見てきたが、六朝後期の梁・陳の時代において、潯陽（湓城）の城樓は、當地を特徴付けるランドマーク的存在として描かれる段階にまで至っていないが、詩跡・江州「庾樓」として歌われるには、時期的に成熟した段階には至っていなかったと結論づけられるだろう。詩跡・江州「庾樓」が、庾亮の風流韻事

の舞臺として詩に歌われるようになるには、庾亮の事件が、「かつての六朝貴族の風流韻事」として、眞に歴史化され、さらに、「江州」潯陽（湓城）のイメージが強固に定着し、そのことによって、「庾亮」武昌のイメージの結びつきが、「庾亮」江州刺史」という連想に比して相對的に薄れるに至った、中唐の白居易らの九世紀頃まで待たねばならなかったのである。⁽²⁾

五

前節まで、六朝期の江州（潯陽・湓城）の城樓を歌った詩作品が、詩跡・江州「庾樓」を形成しえなかったことを述べてきたが、最後に、そこから少し視點の角度を変えて、江州（潯陽・湓城）の城樓が、それ自體として詩跡となり得なかったという理由について考えることにしたい。それはすなわち、六朝期の時點で、江州（潯陽・湓城）の城樓は、かの地を特徴付けるランドマーク的存在として、詩歌の描かれる段階にまで至っていないならば、わざわざ虚構の詩跡である江州「庾樓」としてではなく、獨自に江州（潯陽・湓城）の城樓のイメージをもって、詩跡化することも可能だったのではないか、それなのにどうしてそのようなことが起きなかったのか、ということである。この疑問—なぜ江州（潯陽・湓城）の城樓がそれ自體として詩跡化しなかったかという理由—について、ある土地（あるいは建造物など）が詩跡として成立するための條件とは何か、言い換

えるならば、「詩跡」というものが成立する必須条件とは何か、ということ踏まえつつ、述べていくことにしたい。

そもそも「詩跡」というものが成立する必須条件とは何であろうか。この問題については、すでに先行論文に明確な見解が提出されており、そこには、①ある具體的な空間・物件、②その空間・物件に固定的な『名稱』（地名）『建築物名』等が存在すること、③詩に歌われること（著名な作品、著名な詩人の作品であることが望ましい）、という三条件が挙げられている。

この三条件を江州（潯陽・浚城）の城樓に当てはめてみると、①および③の条件は、すでに六朝期の詩の段階である程度クリアしているが、②の「名稱」という条件が満たされていないことが分かる。前節までに挙げた六朝期の詩作品では、江州（潯陽・浚城）の城樓は、城樓としての特定の名稱では歌われておらず、恐らくはこのことが、江州（潯陽・浚城）の城樓それ自体を詩跡化させることを困難なものにしたのであろう。というのも、詩中に「江州（潯陽・浚城）の城樓」と歌われている段階では、讀者には、それが江州（潯陽・浚城）城内に複数あるであろう城樓の一つという、漠然としたイメージしか持ち得ず、詩跡として歌われる城樓が一體どれであるのかを簡單には特定できないからである。言い換えれば、六朝期の詩歌において、「江州（潯陽・浚城）の城樓」として歌われていた状態では、詩跡としての個別性をイメージ化するのは容易ではなく、それ

江州「庾樓」の出現するまで（住谷）

が詩跡化するためには、その獨自のイメージを容易に連想する手がかりとしての何らかの安定した名稱（固有名）が必要だったということになるのだろう。假に江州（潯陽・浚城）の城樓が、六朝期の時點で、例えば詩跡として名高い「芙蓉樓」や「黃鶴樓」のような安定した名稱（固有名）を持ち得ていたならば、あるいは江州「庾樓」とは關係なく、江州（潯陽・浚城）の城樓それ自体として詩跡化した可能性もあったかもしれない。だが、幸か不幸か、江州（潯陽・浚城）の城樓は、六朝期のこの時點では、歴代の文學作品中に安定して歌い繼がれるような名稱（固有名）を持ちえなかったため、詩跡としての地位を確立することはできなかったのである。

※ 逆に言えば、これら詩跡というものを成立させる必須条件が一旦そろってしまえば、たとえ史實とは無縁の地であったとしても、虚構の詩跡として詩などの文學作品に歌われることは可能になる。その例として、虚構の詩跡として名高い黃州（現湖北省黃岡市黃州區）の赤壁（東坡赤壁）が挙げられる。黃州の赤壁は、三國時代の古戰場として知られる實際の赤壁（三國赤壁、現湖北省咸寧市赤壁市）ではなく、この地が赤壁の古戰場と廣く見なされるようになったのは、黃州に傳わっていた民間傳承にもとづき、晩唐の杜牧が詠んだ次の詩が、大きな影

中國詩文論叢 第二十集

響を與えた可能性が高いとされている。⁽²⁸⁾

齊安郡(黃州) 晚秋 杜牧

柳岸風來影漸疎 柳岸 風來りて 影 漸く疎に
使君家似野人居 使君 家は似たり 野人の居に
雲容水態還堪賞 雲容 水態 還た 賞づるに堪へ
嘯志歌懷亦自如 嘯志 歌懷 亦た 自如たり
雨暗殘燈棋欲散 雨は殘燈に暗く 棋 散ぜんと欲し
酒醒孤枕雁來初 酒は孤枕に醒めて 雁 來たる初
可憐赤壁爭雄渡 憐む可し 赤壁 雄を爭ひし渡
唯有簑翁坐釣魚 唯だ簑翁の坐して魚を釣る有るのみ

赤壁 杜牧

折戟沈沙鐵未銷 折戟沙に沈み 鐵未だ銷けず
自將磨洗認前朝 自の磨洗を將て 前朝を認む
東風不與周郎便 東風 周郎の與に便ぜずんば
銅雀春深鎖二喬 銅雀 春深くして 二喬を鎖さん

黃州の赤壁は、この杜牧の詩より後、宋代の書籍中に三國時代の古戦場の地の一つとして新たに言及されるようになる(王象之『輿地紀勝』卷七十九、漢陽軍の記述によると、『齊安拾遺』がその始まりではないかとされる)。

そして、北宋の蘇軾の名作「赤壁賦」がこの地から生み出されたことで、史實とは無縁であるにもかかわらず、三國の歴史を懷古する詩跡としての地位を確立したのである。先述した詩跡を形成する條件に照らせば、①黃州という土地、②「赤壁」という名稱、③杜牧・蘇軾の名作、という三條件がそろったことによって、虚構の詩跡が形成されるようになったと言えるであろう。

ここまで述べてきたことによって、江州(潯陽・湓城)の城樓が詩跡化するにあたって、「庾樓」という名稱がどれほど重要な意味を持っていたかが分かるだろう。江州(潯陽・湓城)の城樓は、六朝期の詩の中で、すでに江州(潯陽・湓城)の城市を特徴付けるランドマークとしての機能を得るまでに至りながら、さらにそのイメージを集約させる安定した「名稱」(固有名)を持ちえなかったことにより、今一步のところで詩跡化することができずにいた。それが九世紀頃、唐代も中葉を過ぎたことで、時代の斷層を隔てて、庾亮の城樓での事件は、「過ぎ去りし時代の六朝貴族の風流韻事」として、眞に歴史上の一挿話となり、さらにその故事は、「庾亮〓江州刺史」という連想から、江州(潯陽・湓城)の城樓と結びつくことになった。そしてその結びつきは、江州(潯陽・湓城)の城樓に、それまでになかった、より豊かな歴史的イメージを喚起する名稱「庾

樓」を生み出すことになったのである。こうして一旦、詩跡化のための条件を獲得した江州「庾樓」は、白居易の作品によって詩跡としての地位を急速に確立させ、さらに白詩以後の詩人たちに、数多くの詩作品を生み出す豊饒な文藝的土壌となったのである。

【注】

(1) 詩の本文は、『白居易詩集校注』卷十五（中華書局、二〇〇六年）による。

(2) 本論での「詩跡」の語は、「詩歌の中で獨特のイメージをもって歌われる著名な土地（あるいは建築物など）」を意味する（「詩的名勝」などの語で言い表されることもある）。

「詩跡」に關する詳細な解説については、①松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、一九九九年）所收「Ⅲ 名詩のふるさと（詩跡）」（植木久行執筆）、②松浦友久「漢詩—美の在りか—」（岩波新書、二〇〇二年）所收「Ⅳ」詩跡（歌枕の旅—名詩のふるさと—」などを参照。なお、②では、詩跡の形成過程について、三種の類型—（一）史實や傳説を前提にした詩跡、（二）既存の史實や傳説がない詩跡、（三）個別的な詩跡を含む廣域地の詩跡—to 類別して解説しているが、本論で扱う江州「庾樓」は、この類別の中では、第一の類型「史實や傳承を前提にした詩跡」に分類されるであろう。

(3) 白詩以外に、江州「庾樓」を歌ったものとしては、同時江州「庾樓」の出現するまで（住谷）

代では元稹・李紳らの詩がある。しかし、白居易はそのなかでも群を抜いて多くの作品を残しており（「庾樓」「庾亮樓」「庾公樓」と明記してあるものに限っても、「詠意」「初到江州」「庾樓曉望」「庾樓新歲」「三月三日登庾樓寄庾三十二」「山中酬江州崔使君見寄」「題崔使君新樓」「重到江州感舊遊題郡樓十一韻」の八首があり、このほか明記していないものの、「題潯陽樓」「夜送孟司功」「江樓聞砧（江州作）」「江樓夜吟元九律詩成三十韻」「潯陽春三題 春來」など江州の城樓に言及した作品がある）、また、先述の元稹の詩についても、江州「庾樓」は、すべて白居易との贈答詩（「水上寄樂天」「憑李忠州寄書樂天」「酬樂天見憶兼傷仲遠」）の中で歌われている。これらの點を考えれば、詩跡としての江州「庾樓」の確立には、白居易の影響が決定的であったと言っても過言ではないだろう。

(4) 著名な詩人の作品のみでも、晩唐の鄭谷「送人之九江謁郡侯苗員外紳」、北宋の蘇轍「庾樓」「自黃州還江州」、南宋の范成大「江州庾樓夜宴」、清の王士禛「琵琶亭晚望」、查慎行「江漲八韻」「午日重登庾樓和朱恆齋太守」「發潯陽訓恆齋贈別二首」其二などが挙げられる。

(5) 南宋の范成大『吳船錄』卷下には、「泊江州、登庾樓……庾亮故事本是武昌南樓。後人以亮嘗刺江州、故亦以庾名此樓」とある。また、陸游『入蜀記』卷二、八月五日の記述には、「庾亮嘗爲江荆豫州刺史、其實則治武昌。若武昌南樓

中國詩文論叢 第三十集

名、庾樓猶有理。今江州治所、在晉特柴桑縣之湓口關耳。此樓（庾樓）附會甚明然。白樂天詩、固已云、『潯陽欲到思無窮、庾亮樓南湓口東』。則承誤亦久矣」とある。だが、このように江州「庾樓」の由來が誤りであると指摘されたにもかかわらず、注（4）に見られるように、誤りを指摘した范成大自身が詩に詠んでいるのをはじめ、江州「庾樓」は以後も多くの詩人たちに詠まれ続け、詩跡としての地位が揺らぐことはなかった。

（6）本文は、楊勇『世說新語校箋』（中華書局、二〇〇六年）による。

（7）本文は、中華書局の標點本（一九七四年）による。

（8）本文は、中華書局の標點本（一九七二年）による。

（9）『晉書』卷七十三、庾翼傳の記述によると、庾翼は庾亮の死後（三四〇）、その後任として、都督江荆司雍梁益六州諸軍事・安西將軍・荊州刺史・假節に任命され、武昌に鎮した。庾翼が江州の治所を豫章に戻した具體的な年代は不明だが、恐らくは、江州都督就任から、彼が死去した永和元年（三四五）の間のことであろう。

（10）『南齊書』の他、梁の沈約『宋書』卷三十六、州郡志二、江州刺史の條（中華書局、一九七四年）にも同様に、①惠帝の元康元年に江州を設置（治所は豫章）、②東晉の成帝の咸康六年（三四〇）に尋陽郡に治所を遷す、③庾翼が再び治所を豫章に戻す、等の記述が見られる。

（11）なお、白居易の親友の一人である劉禹錫の「有所嗟二首」

其一には、「庾令樓中初見時、武昌春柳鬬腰肢」と、武昌の南樓（庾亮樓）に言及している箇所があり、白居易も劉禹錫のこの詩に唱和した作品を残している（『和劉郎中傷鄂姬』）。このことから、少なくとも詩が作られた大和二年（八二八）の時点で、白居易が武昌の南樓（庾亮樓）の存在を知っていたことは確実である。それ以前の江州司馬時代、白居易が江州「庾樓」について、それが虚構のものであることを知っていたかは不明だが、おそらくは江州司馬の時にも、虚構であることを承知の上で、當地の傳承に敬意を表し、江州という土地のイメージを豊かに彩る「詩跡」として、白居易が詩に詠んだ可能性は高いのではないかと筆者は推測する。

（12）詩の詩題および本文は、李善注『文選』卷二十（胡克家本）によったが、「方舟新舊知」の句は、四部叢刊初編『六臣註文選』に従い訓讀した。

（13）詩の本文は、龔斌『陶淵明集校箋』卷二（上海古籍出版社、一九九六年）による。

（14）『文選』卷二十の謝詩の題下注（李善注）には、「集曰、謝還豫章、庾被徵還都。王撫軍送至湓口南樓作」とある。また、陶詩についても、日中の譯注書の多くが、謝詩と同時期の作と見なしている。本論もこれら先行書籍の見解に従うこととする。なお、この二首が書かれた年代について

は、翌永初二年（四二一）とする書籍も多いが、ここでは龔斌の考證に従うことにする。

- (15) こうした陶詩の風景描寫の特異性については、松原朗「鮑照における離別詩の開拓」（同『中國離別詩の成立』研文出版、二〇〇三年）を参照。

- (16) 詩人が實際に目にしている風景を、個別のものとして文學作品中に描寫することが本格的に始まるには、陶淵明のこの詩が書かれた數年後に登場する謝靈運の山水詩を待たねばならない。

- (17) 詩の本文は、李伯齊『何遜集校注（修訂本）』卷二（中華書局、二〇一〇年）による。

- (18) 詩の本文は、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』陳詩卷三による。

- (19) 詩の繫年および背景については、注（17）の李伯齊の注による。

- (20) 何遜の離別詩の特色については、松原朗「何遜と六朝離別詩の歸着」（同『中國離別詩の成立』研文出版、二〇〇三年）を参照。

- (21) 六朝以後で白居易以前に江州（潯陽・湓城）の城樓に言及した唐詩としては、李白「流夜郎永華寺寄潯陽群官」の「朝別凌煙樓、暝投永華寺」や、韋應物「登郡寄京師諸季淮南子弟」の「始罷永陽守、復臥潯陽樓」などがある。このうち、李白の詩に見える「凌煙樓」とは、六朝時代、劉宋

江州「庾樓」の出現するまで（住谷）

の臨川王劉義慶が江州刺史のときに建てた城樓であり、その際、劉義慶の配下であった鮑照の手によって「凌煙樓銘」という作品も残された。しかし不思議なことに、この江州（潯陽・湓城）の凌煙樓は、鮑照・李白という著名な文學者たちに取り上げられたにもかかわらず、江州（潯陽・湓城）を舞臺としたその後の文學作品に言及されることがなかったため、詩跡化することができなかった。

- (22) なお、北宋の元祐年間（一〇八六―一九四）、鄂州江夏縣（現湖北省武漢市武昌區）の黃鶴山（蛇山）上に、當地の長官・方澤が「南樓」を再建し（『輿地紀勝』卷八十二）、北宋の黃庭堅「鄂州南樓書事四首」其四や詞「離亭燕」、南宋の范成大「鄂州南樓」や詞「水調歌頭」、陸游「乘大風發巴陵」「南樓」など、宋代の諸作品には、この樓を武昌の南樓（庾亮樓）と見なしているものが多い。

- (23) さらに付言すると、東晉期の江州の治所であった豫章（鍾陵、唐代の洪州の治所）にも、「庾樓（庾公樓）」と呼ばれる城樓が存在した可能性がある。中唐の權德輿「戸部王曹長楊考功崔刑部二院長並同鍾陵使府之舊因以寄贈又陪郎署喜甚常僚因書所懷且敘所知」に、「待月登庾樓、排雲上蕭寺」とあり、晩唐の釋貫休が咸通四、五年（八六三―八六四）に鍾陵の山居で作った「山居詩二十四首」其二でも、「明月清風宗炳社、夕陽秋色庾公樓」と歌われている。

- (24) ちなみに、白居易が司馬として江州（潯陽・湓城）に赴

中國詩文論叢 第三十集

任した三年後の元和十三年（八一八）の作「題崔使君新樓」には、「憂人何處可銷憂、碧甃紅欄溢水頭。從此潯陽風月夜、崔公（崔能）樓替庾公樓」とある。これによると、白居易が江州司馬であった期間中に、當時の江州刺史であった崔能によって、それまでの庾樓に替わり、新しい樓が建てられたらしい。

- (25) 寺尾剛「李白における武漢の意義——「詩的古跡」の生成をめぐって——」（『中國詩文論叢』第十一集、一九九二年）より。なお當該論文は、「詩的古跡」（「詩跡」という名稱を使用している）。

- (26) あるいは注（21）の鮑照・李白の作品に見える「凌煙樓」が以後の文學作品に繼續的に取り上げられたならば、江州（潯陽・湓城）をイメージするランドマーク的地位を獲得し得たかもしれない。

- (27) そのため、第四節に挙げた張正見の詩は、「湓城詩」という詩題が示すように、詩跡・江州「庾樓」を歌うのではなく、江州（潯陽・湓城）を歌う作品となっている。第一句の「匡山暖遠壑」は、有名な廬山という、江州（潯陽・湓城）という土地の特色を最も強く印象づけるランドマークを描き、第二句の「灌壘屬中流」は、江州（潯陽・湓城）という城市が、前漢初期の將軍・灌嬰によって築かれた城に始まるという歴史的來歴（『藝文類聚』卷九、水部・井に引く、『潯陽記』より）を歌いあげる。このように「空閒」

と「時間」の二つの角度から江州（潯陽・湓城）という地の持つ特色を鮮やかに切り取ることで、詩跡・江州（潯陽・湓城）のイメージを集約化させることに成功しているといえよう。

- (28) 黃州の赤壁の詩跡化における杜牧の詩の影響は、松尾幸忠「杜牧と黃州赤壁——その詩跡化に關する一考察——」（『中國詩文論叢』第八集、一九八九年）を参照。

〔附記〕本論文の作成にあたり、武昌の南樓（庾亮樓）を詠んだ詩作品に關して、愛知大學經營學部の矢田博士教授から貴重なご指摘を頂いたことを記し、併せて深謝する。